

富ノ森城跡出土の柿経(こけらきょう)

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 富ノ森城跡出土の柿経 (左は出土状況、右は出土した柿経の一部)

はじめに 2021年度に行なった京都市伏見区横大路六反畑に所在する富ノ森城跡^{とみの もりじょう}の発掘調査で、安土桃山時代の溝から大量の木の薄板が出土しました(写真1)。薄板は先端を山形に尖らせた圭頭状で下端は方形を呈し、長さ269mm×幅26mm×厚み0.5mmの板が複数枚重なり、表面には妙法蓮華経(法華経)が写経されています。このように、木の薄板に写経したものを柿経^{こけらきょう}(「柿」^{かき}とは別字)とといいます。側面に墨痕が確認できたため、重なった状態のまま取り上げました。

柿経 柿経は近畿地方を中心に、平安時代後期から江戸時代中期にかけて、死者の追善供養や死後の

安楽を願って製作されたと考えられています。これまでに確認されている最も古い柿経として、伏見区の鳥羽離宮跡(124次調査)で出土した平安時代後期の資料が挙げられます。また、文献では『百練抄』養和元年(1181)十月十一日条の「柿葉を俵十二に詰めて東海西海に流した」という記述が初見とされています。社寺などで保管されていた伝世品や、今回のように発掘調査での出土品などを合わせて、これまで京都府内で17例、全国で150例ほどが確認されています。

写経される経典は法華経が最も多く、「序品第一」から「普賢菩薩勸発品第二十八」まで、八卷二十八品で構成され、その文字数

は69,000字を超えます。通常、1枚に1行(17文字)であるため、両面に写経した場合2,000枚以上、片面に写経すると4,000枚以上の薄板が必要になります。今回出土した柿経は、片面写経で2,200枚程度であり、第一巻から第八巻までが断続的に確認できたため、本来あった柿経の半分ほどが出土したと考えています。1,000枚以上の出土は、京都府内では初めてのことです。

富ノ森城跡出土の柿経 柿経は20枚または40枚を1つの単位としていることが多く、本例も20枚を一束としています。その1枚目には、経文の下に「二ノ四(二巻の四束目)」「五ノ一(五巻の一束目)」

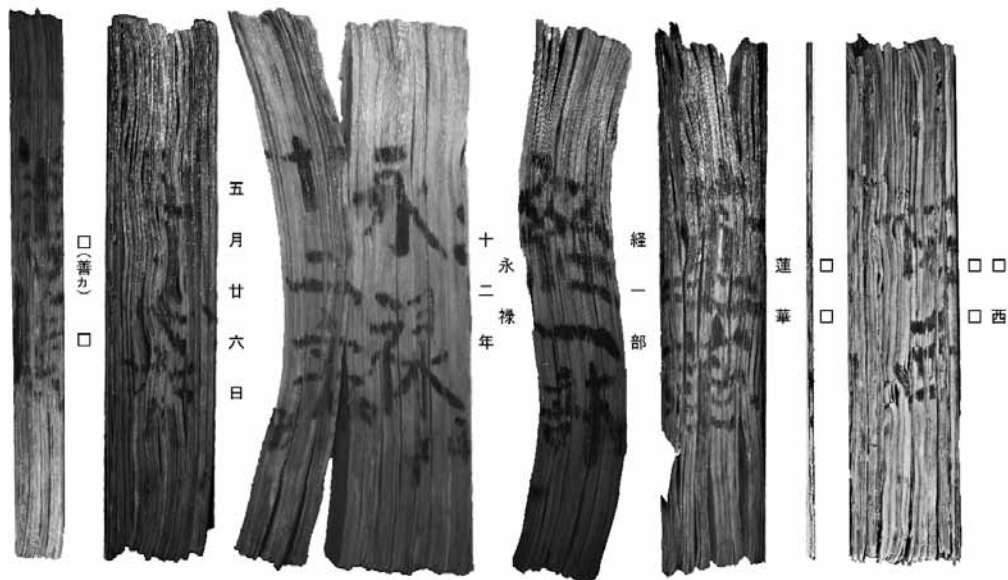


写真2 富ノ森城跡出土柿経の側面墨書（赤外線写真）

というように^{けんそく}巻束番号をふっています。

第一巻から第三巻にあたる柿経の側面には、「□西 □□ □□ 蓮華 経一部 永禄 十二年 五月廿六日 □（善カ）□」と記されていることが確認できました（写真2）。永禄12年（1569）5月26日に完成した、或いは奉納された資料と考えられます。これまでの現存資料や絵図などから、柿経を円筒状に束ね、竹の^{たが}箍などで締め

られていたことが確認されています（写真3）。本資料も、出土位置と経文の前後関係から束ねられていた可能性が高く、第八巻の末尾を中心に右巻きし、東とした後、胴側面となる第一巻から第三巻の側面に日付等を記したのではないかと推定しています。出土資料で年号の書かれた柿経は少なく、全国で15例ほどしかありません。なかでも、側面への紀年が明確に確認できたものは、愛知県の清州城下町遺跡と今回の富ノ森城跡の2例のみとなっており、大変貴重な遺物といえます。

経文を観察すると、脱字をして文字列横に書き足すもの、誤字・脱字したままのもの、誤字を塗りつぶして書き足すものなどが見られます。片面に書いたが失敗してしまったため、裏面に同じ箇所を書き直した例も確認できました。また、20枚ごとに記入する巻束番号には、同じ番号を異なる3枚に書いた箇所もあります。枚数を数え間違えてしまいすぐには気づかなかったのか、その後もしばらく

番号の重複は続きます。ある程度の正確性は求められたものの、その内容よりも速く写経を完成させることに重点が置かれたのかもしれない。

おわりに 現在、側面に墨書されていない柿経は1枚ずつ剥がし、その内容や特徴などを更に詳しく調査中です。剥がした柿経の文字を観察すると、字体の違いから複数人が写経に携わっていたようです。また、写経後に誤字を訂正した人物の字体が違うことから、内容をチェックする校正役の存在も伺えます。

富ノ森城跡出土の柿経は、側面に紀年を有す稀有な資料であると共に、その1文字1文字から、達筆な人、間違いをのび間違いをのび誤魔化しがちな人、書き手も気づかぬ間違いに修正を入れる人…などと、思わず400年以上の時を遡り、製作者の人柄やその苦勞、写経の様子を思い描かずにはいられない、想像力を掻き立てられてしまう遺物です。

（北村 彩）



写真3 滋賀県松尾神社伝来柿経

井上優「滋賀県における「こけら経」について—東近江市松尾神社本殿伝来法華経を中心に—」『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要第33号』平成29年 より転載